

世界をみつめて2

「旧石器ねつ造事件（1）」

南 博史

平成12年11月5日の毎日新聞朝刊第一面に、「旧石器発掘ねつ造」の記事が躍った。宮城県上高森遺跡の調査団長である藤村新一東北旧石器文化研究所副理事長が、早朝の発掘現場で自ら持ち込んだ石器を埋めるシーンが連続写真で捉えられていた。つまり、その埋めた石器を自身で発掘し、発見したと公にしていたとなると・・・どう言い逃れもできないこの決定的瞬間は、私たち考古学研究者だけでなく日本、さらに世界に大きな衝撃を与えた。20世紀初頭、イギリスでねつ造され、半世紀にわたって人類進化の謎であった化石人類「ピルトダウン人*」にも匹敵する世界的事件となったのである。

この旧石器ねつ造事件がなぜこれほど大きくとりあげられ、考古学界に衝撃を与えたのか。まず、その時の旧石器時代の考古学研究について触れてみたい。

500万年とも言われる人類の歴史の中で、人類が初めて石で道具を作り使用した時代、つまり石器時代は約250万年前に始まる。そして、土器が発明され、農耕が開始される今から数千年前までの長い間、人類は石を打ち欠いて作る石器を使った狩猟採集時代を送ってきた。

まず最初の石器は、手ごろな石の一部を打ち欠いて鋭利な部分を作った程度だったが、時間の経過とともに約100万～50万年前には握斧と呼ばれる形の整った石器が作られるようになる。ちなみにこのころの人類は、原人（ホモ・エレクトス）である。そして、北京原人で有名なように、アフリカで誕生した人類は、このころには中近東からヨーロッパ、ユーラシア大陸の東端まで拡散していた。

つまり、化石人類とよばれる古い人骨（化石化しているためそう呼ばれる）の研究に頼らざるを得なかった初期人類の研究は、石器の考古学的分析と解釈が可能になり、これらを作った人類最初の文化の探求、進化の研究が始まるのである。

一方、この原人は私たち現生人類（新人：ホモ・サピエンス・サピエンス）の直接の祖先ではない。現在の研究では、原人と同じくアフリカで約16万年前に誕生したホモ・サピエンス・サピエンスが、同様にアフリカを出

て世界へ拡散。原人から進化したとされるネアンデルタール人と交代（一部、交配の可能性も指摘される）し、私たちにつながっていくのである。

したがって、この人類進化にともなって作られた石器も異なる。ネアンデルタール人は定格的な石の剥片を母岩から計画的に作り出す技法を持っていた。さらに新人は、細石器とよばれる剃刀の刃のような薄くて小さい剥片をそのために整えた石核から大量に作り出した。彼らはこれらを木製の棒に沿って差し込み、石槍や石刀のように使っていた。つまり刃が欠けてもその部分だけを取り換えれば済むわけである。

このような人類化石と石器の種類や製作技法などによって、主に原人の時代を前期旧石器、旧人の時代を中期旧石器、そして私たち新人の時代を後期旧石器というように区分している。

さて、今回の旧石器ねつ造に話を戻そう。

1980年代中ごろまで、日本列島には後期旧石器、つまり新人の遺跡、石器しか発見されておらず、中期から前期にさかのぼることはないと言われていた。ところが、宮城県を中心に中期どころか前期にさかのぼる遺跡の発見が続いた。当然、学界の中でもその存在について議論が巻き起こるのであるが、実際に層位学的発掘（前号参照）で出土したというまぎれもない事実と発見された火山灰層の科学的年代測定が裏付けになった。比較的短い間に一度に堆積する火山灰の重層、つまり地層累重の法則（前号参照）とそれぞれの地層の絶対年代が明らかになることで、そこから出土する石器の年代が30万年前とか60万年前という古いものであることを科学的に証明したのである。

これによって、日本列島には原人や旧人が住み、新人と交代したという歴史が教科書にも掲載される通説になり、一躍東アジアにおける旧石器研究の中心地となった。誰もが考古学者の倫理感を疑わなかった。

※オランウータンの下あごの骨と人間の頭骨を組みあわせていた。

みなみ ひろし（教授・考古学）